中央中学校生徒の皆さんへ　　2019. 3. 11　　校長　鈴木英巳

皆さんが小学校入学前に発生した東日本大震災は、発生から今日で８年を迎えます。15,000 人以上の方が犠牲になり、いまだ 2,500 人の方が行方不明となった大震災でした。その後、時の経過とともに復興が進み、日常を取り戻すことができている人も多い反面、まだまだ困難な状況の中、必死にがんばっている人がたくさんいます。今なお 52,000 人にも及ぶ方が避難生活を続け、被災した福島第一原子力発電所の廃炉は、見通しがもてていない状況です。

11 日を迎えるに当たり、大震災で被災された、宮城県気仙沼市立階上（はしかみ）中学校の卒業式答辞を紹介します。答辞を読んだ梶原裕太君は、涙に声を詰まらせながらも、必死で訴えていました。映像で残酷な運命に必死で耐えている姿を見て、胸が張り裂けそうでした。こんなに辛い卒業式答辞があるなんて･･･、でも、それと同時にこんなに心をうたれた卒業式答辞も初めてです。力強い誓いの言葉と、ひた向きな強さに感動しました。そして、学ぶべきところが多々あると気付きました。是非、読んでください。

本日は、未曾有（みぞう）の大震災の傷も癒（い）えない最中、わたくしたちの為に、卒業式を挙行していただきありがとうございます。ちょうど、10日前の3月12日、春を思わせる暖かな日でした。わたくしたちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨（ふく）らませ、通いなれたこの学舎を、57名揃（そろ）って巣立つ筈でした。

前日の11日。一足早く渡された、思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に、思いを馳（は）せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名づけられる、天変地異（てんぺんちい）が起こるとも知らずに･･。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていたわたくしたちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、わたくしたちから大切なものを、容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は、14時46分を指したままです。でも、時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには、大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく事が、これからの、わたくしたちの使命です。

わたくしたちは今、それぞれの新しい人生の一歩を踏み出します。どこにいても、何をしていようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごして下さい。

先生方、親身の御指導、ありがとうございました。先生方が、いかにわたくしたちを思って下さっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々な御支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願い致します。お父さん、お母さん、家族の皆さん、これからわたくしたちが歩んでいく姿を見守っていて下さい。必ず、よき社会人になります。

わたくしは、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。
最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成23年3月22日　第64回卒業生代表　梶原　裕太　（文部科学省白書より引用）